

AFC Forum

Agriculture, Forestry, Fisheries, Food Business and Consumers

10

2018

特集 食べるeコマースの実力



特集

食べるeコマースの実力

3 拡大するEC市場における食品EC

長瀬 直人

EC(電子商取引)化率が非常に低い食品だが、近年、さまざまな取り組みが見られるようになってきた。今後、ECは生産者や食品企業にとってチャンスとなりうるか検証する

7 販路の心は「ありがとう、またよろしく」

及川 智正

生産者と生活者をつなぐプラットフォーム事業「農家の直売所」で急成長したベンチャー企業が、ECを活用した「農業の流通革命」に乗り出した。描く未来図とは

11 生産者と消費者をつなぐ、次世代の形

松田 恭子

生産者と消費者の双方向コミュニケーションを持つECサイトが話題だ。サイトを利用する生産者の目論みを通じて次世代eコマースの在り方を読む

情報戦略レポート

15 食の志向は「健康」「経済性」「簡便化」の3大志向に集中

—2018年度上半期 消費者動向調査—

経営紹介

経営紹介

23 農事組合法人 東濃ミートセンター／岐阜県 荒井 幹広

地域プロイラー生産の中心的存在である食肉加工場が、インテグレーションの仕組みをつくる。養鶏業者の連携強化により大企業に太刀打ちし、皆で生き残るためだという

変革は人にあり

27 株式会社大野ファーム。／北海道 大野 泰裕

健康な牛づくりに餌にこだわる肉用牛一貫生産者。畑作経営の強みを活かして粗飼料の自給を基本とするが、土や栽培する種子にも健康を意識する

11月号予告

特集は「都市農業」を予定。

マーケットインの発想で生産から販売まで行い、都市住民との交流を重視するなど農業経営の理想形ともいえる都市農業。制度改正や実例を踏まえ、都市における農業経営のあり方を考察し将来を展望する。



撮影:片岡 巖

宮崎県高千穂町
2013年11月撮影

里の秋

■日が昇り朝霧の消えた高千穂盆地では、収穫を終えた田に赤とんぼが飛び交っている。広がるのどかな里の風景■

シリーズ・その他

観天望気

食の情報の重さ 松本 邦義 2

農と食の邂逅

梶浦 艶／徳島県

青山 浩子(文) 河野 千年(撮影) 19

フォーラムエッセイ

旬に出会う 公文 健太郎 22

主張・多論百出

日本雁を保護する会 呉地 正行 25

耳よりな話 198回

着果処理が不要なナス 吉岡 宏 30

まちづくりむらづくり

親子山村留学で児童数をV字型回復

「結いの心」で助け合い村おこし

阿室校区活性化対策委員会／鹿児島県大島郡宇検村
後藤 恭子 31

書評

山下 一仁 著

『いま蘇る柳田國男の農政改革』

村田 泰夫 34

インフォメーション

第二回「アグリフードEXPO大阪2019」の出展者を募集しています 情報企画部 35

全国六七八先の出展者の販路拡大を支援 情報企画部 36

期待膨らむ農業経営アドバイザー 大分支店 36

生産量日本一の白花豆で地域活性化を考える
北見支店 36

みんなの広場・編集後記 37

ご案内

第12回アグリフードEXPO大阪2019 38

望天 観気

食の情報の重さ

日本人の食生活にとって衝撃的な出来事が起きました。厚生労働省が二〇一五年版の「日本人の食事摂取基準」からコレステロールの摂取目標量を撤廃。これにより、「卵は一日一個までにしなないと健康に害がある」という定説がくつがえされたのです。

この説は、今からさかのぼることおよそ一〇〇年前、一九一三年のロシアでのウサギによる研究を基に、六〇年代に米国で発表された「卵黄に含まれるコレステロールが動脈硬化の原因で、卵の消費を控えるべきである」とする論文がその発端とされています。

長い間、動脈硬化の原因と指摘され続けてきた卵ですが、その後の各国での研究により、卵は健康な人の血中コレステロールを上昇させないことが明らかになりました。日本でも八一年に、人体とコレステロールに関する興味深い卵の研究結果が発表されています。健康な成人に一日五〜一〇個の卵を五日間連続して食べさせた結果、一日に一〇個ずつ食べた人でも血中コレステロールの値はほとんど変化しないというものです。

そして今回の摂取目標量撤廃により、ようやく、間違った情報に終止符が打たれたというわけです。

卵には私たちが必要とするさまざまな栄養素が多く含まれています。良質な動物性たんぱく質には筋肉量や筋力の増大効果がある他、メチオニンなどの含硫アミノ酸は弱った肝臓の回復力を高めます。日本人に不足しがちなビタミン・ミネラルも豊富に含まれています。まさに完全食品と言っても過言ではありません。

日本人は鶏卵を一人当たり年間三三二個食べている、世界二位の卵好きの国民です(二〇一七年公表)。食に関しさまざまな情報があふれていますが、われわれ卵に携わる者は、消費者に対して卵に関する正しい情報を伝える義務があります。

食べることは生きること、人間のいのちに関わることだからです。

一般社団法人日本卵業協会 副会長

松本 邦義

まつもと くによし

1965年埼玉県生まれ。88年慶應義塾大学法学部政治学科卒業。90年松本米穀精麦株式会社に入社し2006年より代表取締役社長。日本卵業協会副会長の他、埼玉県養鶏協会副会長、一般社団法人埼玉県配合飼料価格安定基金協会理事も務める。さまざまなイベントを通じ「1日1個ではなく、2個の卵を食べて健康になろう」という「たまご2個で、みんなニコニコ」を推進していくプロジェクトに取り組む。



蜜蜂はいちご受粉用を
経営の一つに取り入れた
こんな小さい体で
ようけ、蜜を集めて来ます
すごいつて感心しています



梶浦 艶さん

徳島県吉野川市

梶浦農園株式会社 取締役

二〇〇二年、外国人技能実習生として中国から
来日し、実習先は徳島県阿波市の電子部品工
場。〇四年帰国し、三年後に再来日、いちご農家
の嫁さんになる。現在、いちご、養蜂に青ネギの
周年栽培を切り盛りする。





P19:山東省青島出身の艶さん。青島ビールで知られ、また風光明媚な観光地でもある p20:約200群の巣箱の面倒をみる他、青ネギ(2ha)といちご(15a)を生産する(右上) 購入客からの「おいしい」「また注文したい」という手紙や電話に励まされるという(右下右) 重い巣箱持ち上げるのは重労働のため、艶さんは主に青ネギの出荷責任者として忙しい毎日を送っている。ネギは年に4、5回収穫する(右下左) 蜂蜜の小売価格は980円(小瓶)から3500円(大瓶)まで(左)

運命の人と出会い日本に

自国を離れての生活、そして初めての農業。人知れず悩みもあったことだろう。しかし、取材中、苦労話は一切出ることにはなかった。何事も前向きに捉え、一步を踏み出す。するとちゃんと道が開かれる。そんな考え方に勇気づけられる人は多いはず。周りを明るくする力を持っている女性だ。

中華人民共和国山東省青島市生まれの梶浦艶さん(三六歳)が、外国人技能実習生として来日したのは二〇〇一年。「外国を見てみたい」という好奇心だった。「いとこのお姉さんが実習生として日本に行く聞いて私も応募しました」。実習先は同県阿波市にある電子部品工場。「楽しかった。休みの日は一緒に住むお姉さんたちと遊びに行ったり」。当時は二〇歳になったばかり。最年少で同僚からかわいがってもらったという。

〇四年に帰国し、〇七年に再来日した。今度はいちご農家の梶浦裕樹さん(四二歳)の妻としてだ。阿波市でいちご農家に嫁いだという中国女性、二人を引き合わせた。初対面はテレビ電話。艶さんが見た裕樹さんの印象は「やさしそうな人」。一方、裕樹さんは「愛嬌がある。人相もよく、悪そうな人に見えなかった」と半分冗談を交えながらなれそめを披露してくれた。三カ月ほど後、裕樹さんが艶さんを訪ねて中国へ。その後、艶さんも日本に。この滞在期間中、二人は結婚を決意。わずか六カ月の交際でゴールイ

ンした。

父親は役場勤めをしており、農業とは縁がなかった艶さんにとって、農業もいちご栽培も初めての経験だ。オンシーズンには、夜も明けない午前三時から収穫やパック詰め、に精を出した。それでも「いけた」とあつげらん。「忙しいのは五カ月ぐらい。他の期間は準備だけ」。ちなみに「いけた」とは阿波弁で「大丈夫」という意味。完全に阿波の人である。

未経験ながら養蜂に挑戦

受粉に使うミツバチを専門業者からレンタルしていたが、その業者から「自分で蜂を育ててみたら? 蜂蜜もとれるよ」と提案された。二人は迷いなく「やってみよう」と決めた。結婚後まもなく長男の僚真君(一〇歳)が生まれ、収入を増やしたいという思いもあった。

そうはいっても巣箱や蜂の準備など初期投資が掛かる。艶さんは、裕樹さんの知人を通じて、青年就農給付金制度(現在は、農業次世代人材投資資金)の情報をキャッチした。さっそく書類を揃え、申請書を出すと、吉野川市で初めての認定新規就農者となった。

半年ほど専門業者の元でゼロから養蜂を教わり、二〇一一年から自宅前の駐車場に八つの巣箱(群)を置いて飼いはじめた。一群に二、三万匹のセイヨウミツバチがいる。防護帽子をかぶっていても刺されることがあるという。「赤く腫れて皮膚科に通ったことも

あります」(艶さん)。それでも、初年度から採蜜に成功した。それまで艶さんは蜂蜜を食べたことはなかった。「おいしかった!」思った以上の蜜がとれてうれしかったです」

早速、販路開拓に乗り出した。地元JAが運営する直売所への出荷を手始めに、徳島



左から裕樹さんの母、洋子さん、小学校4年生の僚真君、艶さん、幼稚園年長の僚将(りょうすけ)君、そして裕樹さん

県内外でチェーン展開しているスーパーと交渉。過去にいちごを出荷した実績が認められ、店内の産直コーナーでの販売が始まった。自らウェブサイトを立ち上げ消費者から直接注文を受ける。さらに、吉野川市のふるさと納税の返礼品にもリストアップされるまでになった。母屋の一部を利用し

た加工所がいよいよ手狭になり、一五年に新設。必要な設備資金は、日本公庫の青年等就農資金を活用した。日本公庫が外国籍を持つ女性に同資金を融資したのは全国で初めてだ。

新規参入ながら養蜂で順調に実績を積み上げてこられたのは、蜂や巣箱の世話を手間を惜しまず、小まめに行ってきたことに尽きる。艶さん夫婦は、蜂が阿讃山脈に咲くさまざまな花の蜜を集められるよう、地主と交渉し、山の麓などにスペースを借りるようになった。現在、巣箱は五、六カ所に分散。車で三〇分以上離れた場所もある。裕樹さんたちは採蜜のピークを迎える四、五月には週一回、ピークを過ぎても一〇日〜二週間に一度は訪れる。採蜜するだけでなく、蜂たちがストレスを感じないように素早く健康状態をチェックする。女王蜂がいるか、卵を産んでいるか、病気にかかっているかないかなど。生き物が好きな裕樹さんとは違い、動物があまり得意ではなかった艶さんだが、仕事を分担しあう蜂たちの世界にはひたすら感心させられるという。「蜜を集める蜂、集めた蜜を羽であおいで余分な水分を飛ばし糖度を高める蜂、巣箱を掃除する蜂、巣箱の周囲を見回しする蜂など分業している。こんな小さい体からようけの蜜を集めてくる。すごい」と艶さん。

「おいしい」の言葉を励みに

蜂たちが懸命に集めた蜜を加熱すること

なく、栄養価を丸ごと瓶詰めしたものが梶浦農園の蜂蜜だ。このこだわりの製法が消費者から支持されている。「日本に来て蜂の世話をするとは思ってもいなかった」という艶さんだが、食べた人たちからの「おいしい」「非加熱を探していた」という電話や手紙に接するのが最もうれしい瞬間だという。

「国産蜂蜜は五%程度で、大半は輸入。蜂蜜は高齢者の認知症にも効果があります。輸出も将来は考えたいが、まずは国内で固めたい」と話す艶さんだ。

いちご、養蜂に加え、もう一つ作物が加わった。青ネギの周年栽培だ。仲間の農家の誘いを受け、裕樹さんの祖父が作っていたブドウの畑を活用し、二〇一七年から生産を始めた。裕樹さんにもネギ栽培の経験はなかったが、今では二畝で安定的に生産できるまでになり、関西の業者と契約栽培をしている。「まずはやってみる精神」は夫婦に共通のようだ。「いちごだけやっていた頃から比べてずっと忙しくなった」と話す艶さん。それでも今後、ネギは現在の規模の倍に、養蜂も現在の二〇〇群から五〇〇群に増やすつもりだという。

艶さんに将来の夢を聞くと、「目の前にある仕事をこなすのが精いっぱい」と言いつつ、二人の息子に話題が及ぶと「外国に行かせてあげたい。外国に出ることで視野が広がる」とにっこり。広い視野と前向きな姿勢で日本の農業を支える心強い女性がここにいます。

(青山浩子/文 河野千年/撮影)

「家のご飯が一番幸せ」なんて言葉が理解できるようになったのはごく最近のことである。旅ありきの写真家にとって「家が一番」という言葉は、致命的なつまらなさを表している言葉のように感じてきたのかもしれない。その考えが大きく変わったのは、家の食卓に自ら積極的においしいと思える食材を届けるようになったからだ（届けると書いたのはあくまで調理するのは妻任せになってしまっているからである）。旅先で出会った愛情豊かな農家のご家族や、こだわりを持った野菜職人の作る旬の食材が食卓に並ぶ。食べたい料理に合わせてスーパーに食材を揃えに行くのではなく、その時あるものを農家から直接いただく。これをわがままにできるのは家の食卓しかない。そう、家のご飯が一番幸せなのだ。

特にこだわるのは採れ過ぎたものを集めること。農家からシヨウガが採れ過ぎた、という情報が入ればすかさずキロ単位で送ってもらいシヨウガ一色の食卓を楽しむ。採れ過ぎていてということはい時期つまり旬である。そして気象条件が良く生育が良い、味も良い。東京に住む友人たちにもついでに送りつけておく。皆大喜びだ。採れたものを採れた分だけという農家の都合で成り立つ食卓ほど、満たされる食卓はないのだ。

農の風景をめぐる旅を始めて六年が経った。食卓と同じように、農の風景にも旬がある。実りの季節だけではなく、良いものを作るために日々積み重ねられる農の光景が旬であることもある。

例えばリンゴ。収穫期を迎えた赤い実がたわわに実った光景も良いが、春の摘花の時期も良い。おいしいリンゴをつくるために満開の花から余分な花を手作業で摘み取る。春のうららかな日。花に囲まれリンゴの木に向き合う農家の姿は美しい。気の遠くなるような大変な手間。これが日本の農作物のおいしさの秘密であり、風景の美しさをつくっている。

食べることに、旅をすることにも旬がある。そして農家を知ることでも、もつといろいろな旬を楽しむことができる。農家の採れ過ぎた野菜。農家の手間暇。それらを少し知るだけで旅も、食卓も一番の幸せに変わってゆく。



写真家
公文 健太郎

くもん けんたろう
1981年生まれ。ルポルタージュ、ポートレートを中心に雑誌、書籍、広告で幅広く活動。同時に国内外で「人の営みがつくる風景」をテーマに作品を制作。近年は日本全国の農風景を撮影し『耕す人』と題して写真展・写真集にて発表。写真集に『大地の花』（東方出版）、『BANEP』(青弓社)、『耕す人』（平凡社）、写真絵本に『だいすきなもの』（偕成社）、フォトエッセイに『コマの洋品店』（偕成社）などがある。

旬に出会う

日本雁を保護する会 会長

呉地 正行



●くれち まさゆき●
一九四九年神奈川県生まれ。東北大学理学部卒業。ガン類とその生息地の保護保全に取り組み、市民参加型の自然再生運動や地域おこしを実践。生物多様性を活かし、循環型農業を目指す「ふゆみずたんば」や「田んぼを食べるプロジェクト」を広く紹介。大潟村応援大使、ラムサール・ネットワーク日本共同代表などを務める。

稲

は湿地の植物だ。田植えが終わった水田に一齐に水が張られるのはそのためで、そこに地図にはない広大な湿地が誕生する。農地であるが、湿地の機能も持つ水田は、「農業湿地」として、多様な水辺の生き物の生息地にもなる。水田には他の農地にはない、生き物を育む底力がある。湿地の保全と賢明な利用を目指すラムサール条約でも、水田は湿地の一つに分類され、水田の生物多様性向上を目指す決議(X.31)も採択されている。これまでの調査で、水田では五六八種の生き物が記録され(桐谷他、二〇一〇)、その生物多様性はサンゴ礁や熱帯雨林にも匹敵するほど豊かである。しかし多くの農業関係者の関心は、稲作の害となる「害虫」・「雑草」の管理で、水田の多様な生き物は稲作に被害を与える可能性を秘めた「いないほうがよい」存在と捉えられている。

この考えは、生産性や効率性を追い求める工業型農業とともに広がり、化学農薬(殺虫剤や除草剤など)で、稲以外の生き物を水田から排除し、生産性向

上と省力化を図る農法が一般的になってきた。一見合理的に見えるこの農法の最大の問題は、持続可能な方法ではないことだ。薬剤による生物駆除は、やがてその薬剤に耐性を持つ害虫や雑草を生み出し、同時に害虫を捕食する天敵のクモ類を著しく減少させる。その結果、殺虫剤を散布すると、害虫が倍増するという不合理な事象も起きている。

一方、FAO(国際連合食糧農業機関・二〇〇五)の報告では、水田の原風景が残されている東南アジアの水田では、七〇種余りの魚が獲れ(カンボジア)、家庭で消費される動物タンパクの三分の二が採取されている(ラオス)。またこれ以外にも水田の多くの昆虫類や水草類なども資源として活用され、水田をこ(飯もおかずも取れる複合生産の場とする伝統的な利用が現在も続いている。これらの水田は米の収量だけで経済評価すると、生産性の低い水田となる。しかし、米だけでなく、多様な生物資源も育み、生産する複合生産の場として評価すると、その価値は飛躍的に大きくな

り、地域資源を持続可能に利用する優良事例にもなる。

日本にも、水田の生き物を資源として利用する「ご飯もおかずも取れる」水田文化は存在した。特に水田の植物は、江戸時代には、飢饉に備えた救荒食物として、その利用法などを示した一関藩の『民間備荒録』(建部清庵)、米沢藩の『かてもの』(上杉鷹山)や、『菜譜(水菜)』(貝原益軒)が出版され、利用されていた。その文化をもう一度現代によみがえらせ、生産性効率性を最重視する工業型農業と決別し、持続可能で地域資源循環を最重視する新たな取り組みへとシフトすることを提案したい。

具

体的な取り組みとして「田んぼを食べるプロジェクト」(TTP)を立ち上げた。生物多様性に配慮した農業を行っている農家と連携し、その水田で稲だけでなく、田んぼの生き物を資源として活用する取り組みを行っている。その中で最も注目しているのが、コナギという水田に生える水草だ。コナギは除草剤に敏感なため、通常は無農薬栽培の水田で見られ、除草剤を使用する慣行栽培水田では見られない。コナギは、増えると、稲の初期生育を阻害するところがあるので、農家には最も嫌われている雑草の一つだ。

一方、東南アジアでは、古来よりおいしい野菜として利用され続けている。食べてみると、癖がないのでさまざまな料理に利用でき、レシビも充実してきた。また微量要素を含めた栄養成分を分析したところ、その栄養価は、栄養密度が最も高いといわれるクレソンよりも高いことが分かった。

そこで、コナギを除草ではなく収穫し、試食とレシビ開発を行う取り組みを、二〇二四年から開始した。この取り組みは年々進化している。栄養成分の分析でその価値を可視化し、これまでの除草作業を、プラスを生み出す収穫作業に位置付けることによって、参加者が楽しみながら取り組むことができる。現在、農産物加工会社、レストラン、大学などと共同で、コナギの商品化に向けた検討も行っており、有機JA Sコナギの販売を検討している農家もある。

日本の食料自給率は先進国内で最低レベルだ。自らの食べ物は日本人自らの手で賄うことを本気で考える必要があるが、健全な水田で育った生き物は、安全な食べ物になる。これらの生き物を地域資源として積極的に活用できるシステムが広がれば、そこから新たな農業の潮流が生まれてくる。



ご飯もおかずも取れる水田文化をよみがえらせ 持続可能で地域資源循環の取り組みを重視

着果処理が不要なナス

日本政策金融公庫
テクニカルアドバイザー

吉岡 宏

施

設栽培のナスでは、着果させるためにホルモン剤を散布します。この作業はナス栽培の全労働時間の二〜三割を占める大変な作業です。そのため、最近ではマルハナバチやミツバチを放し飼いし、着果処理の省力化を図ることが行われています。しかし、交配に用いられるマルハナバチは外来種で、逃げ出すと生態系を乱す恐れがあり、また、ミツバチについては数が不足気味で、十分に確保することができないなどの問題を抱えています。

植物には受粉しなくても果実が結実・肥大する単為結果性という性質を持ったものがあります。その例としてキュウリやバナナなどが挙げられます。ナスに単為結果性を持たせると、ホルモン剤散布やハチの放し飼いの必要がなく、省力化と低コスト化が可能になるため、最近では単為結果性を持った品種の育成が盛んに行われています。

わが国におけるナスの単為結果性品種は、一九九四年に野菜・茶業試験場(現農研機構野菜花き研究部門)の門馬信二さんが、イタリアの研究者からヨーロッパで育成された単為結果性品種「Talina」の種子を譲り受けたことに始まります。このナスはヘタが緑色の大果性品種で、日本の主要なナス品種とは外

観的に異なっていました。

門馬さんからTalinaの種子を譲り受けた高知県農業技術センターの松本満夫さんたちは、これを育種親に用いて、二〇〇五年に単為結果性ナス品種「はつゆめ」を育成しました。これがわが国における最初の単為結果性ナス品種です。しかし、普及先が高知県内に限られたことや主力品種よりも収量性が劣ったことなどから普及しませんでした。



単為結果性ナス品種「あのみり」
(写真提供：農研機構野菜花き研究部門 齊藤猛雄氏)

方、野菜・茶業試験場では、齊藤猛雄さんを中心とするグループによって、果実の外観や収量性等を改善する育種が行われ、二〇〇六年に単為結果性品種「あのみり」を育成しました。「あのみり」はわが国における実用的な単為結果性ナス品種の第一号となりました。

その後、「佐賀N1号」(佐賀県)、「とげなし輝楽」(愛知県・農研機構)、「省太」(福岡県・農研機構)、「あのみり2号」(農研機構)、「ラクロ」(株式会社アサヒ農園)、「PC筑陽」(タキイ種苗株式会社)などの単為結果性ナス品種が開発されました。

農家の高齢化と人手不足が進み、また、生産コストの削減が求められる中で、着果管理が不要な単為結果性ナス品種は、今後ますます重要性を増すものと思われれます。

F



Profile

よしおか ひろし
1948年京都府生まれ。弘前大学大学院農学研究科(修士課程)修了後、農林省野菜試験場入省。農林水産技術会議事務局研究調査官、(独)農研機構野菜茶業研究所所長、(社)日本施設園芸協会常務理事などを経て、2012年10月から現職。専門は野菜の栽培生理。農学博士、技術士(農業部門)。



親子山村留学で児童数をV字型回復 「結いの心」で助け合い村おこし

鹿児島県大島郡宇検村
阿室校区活性化対策委員会 会長 後藤 恭子



小中併設校が廃校の危機

私たちが暮らす宇検村は、鹿児島市から南へ約四三〇キロメートル、奄美大島の南西部にあります。村には一四の集落がありますが、阿室校区は平田阿室、屋鈍の三集落からなり、宇検村の中心部から車で一時間ほど走った、焼内湾の入り江沿いにあります。

ここは外洋に面し、「サキバル（風や波が強く当たる場所）」と呼ばれ、古くから半農半漁で生計を立ててきた地域です。阿室校区の現在の人口は二二〇人ほどで、人々が相互に助け合う「結いの心」をモットーに、主産業として水産業と農業が営まれています。

さて、阿室校区にただ一つある学校が、阿室小中学校という小中併設校です。小さな集落の小さな学校なので、地域の人々は子どもたちをわが子、わが孫のように大切にしており、学校行事には多くの方が参加されます。

ところが一九九六年以降、問題が起きたのです。小中学校の児童生徒数が減少を続け、放置すると二〇二一年度以降の四年間は中学生がいなくなり、休校が確実視されるようになりました。

そこで校区の有志が集まり、小中学校の存続に関する地域の考えを把握するため、〇九年に全世帯を対象にアンケート調査を行いました。調査の結果、「集落から子どもたちの声が聞こえなくなるのはさみしい。今、何らかの策を講じるべきだ」と、学校の存続を望む声が多数を占めました。

これを受けて、三集落の区長からなる阿室校区活性化対策委員会が立ち上がりました。委員会は児童生徒数を増やす手だてとして、都会から子どもに来てもらう山村留学を検討しました。

地域の熱意が生んだ留学制度

地域の意向を探ってみると、山村留学への抵抗感を持つ人々も一定数いました。以前に地域で都会の子どもを預かっていた方や、他の地域の実情

から、「子どもだけを高齢家庭で預かることは難しい」という声の主たる理由でした。

しかし、当時は阿室校区への移住者も少なく、このままでは小中学生が増える見込みはありませんでした。その先に待つのは休校です。「なんとしても学校を存続させたい！」という強い熱意で、地域で何度も話し合いを重ねました。そして、親子で地域に移住してもらう「親子山村留学制度」の仕組みをつくることになりました。

この制度は文字通り、地域に子どもだけでなく、親子で移住してもらうことを目的としています。これが軌道に乗れば、学校の児童生徒数の確保だけでなく、親御さんに地域のさまざまな活動に参加してもらうという、地域としてのメリットも生まれます。要は、阿室校区に「世帯」として住まいを構えてもらうことで、地域全体の活性化につなげようと考えたのです。

活動資金は当初の二年間、地域の全世帯が月一〇〇円ずつ拠出し、パンフレットやホームページ

profile

後藤 恭子 ごとう きょうこ

1976年鹿児島県生まれ。99年、東京農業大学卒業。在学中にアメリカでの農業研修を経験する。2006年宇検村に家族で1ターン移住。教員として阿室小中学校に勤務の後、13年に就農。農園「スミューファーム」を営む傍ら、地域活性化に取り組んでいる。農園では、現在、1.2畝の土地に13品種・100本のフィンガーライム、レモン、島ニンニク、ボタンボウフウなどの果樹を栽培する。

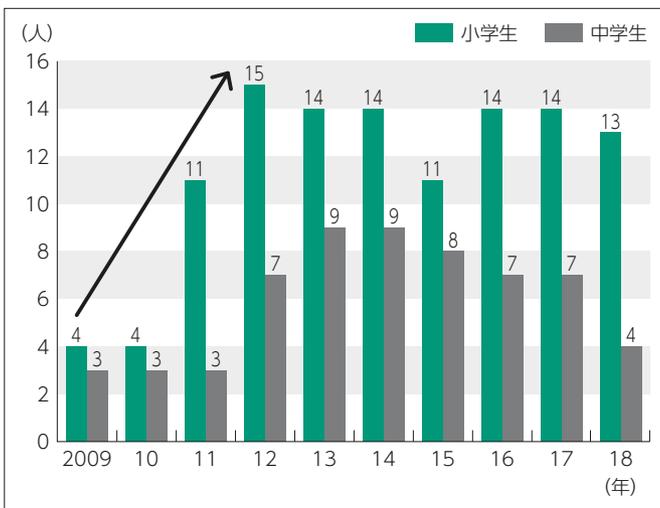
阿室校区活性化対策委員会

2009年、宇検村の阿室校区(平田・阿室・屋鈍の3集落)の各区長、学校教諭などを中心に、阿室小中学校の存続および校区の活性化を目的として発足。構成は、全体の活動方向性を検討する本部(役員会)と、下部組織として山村留学班、企画班、農業班の3班を置き、相互に助け合う「結いの心」で活動している。2017年に第59回農林水産祭 村づくり部門で天皇杯を受賞。



子どもたちが増え子ども会活動も盛んになった。写真は、空き瓶回収の様子。

図 阿室小中学校の生徒数の推移(2009年以降)



を作成、全国に山村留学の募集を行いました。また、留学希望者のネットワークとなるのは住居の確保です。委員会は地域の全ての空き家を調査し、家主さんと交渉を重ねました。さらに、子どもたちも一緒にになり、ボランティアで空き家の改修作業を行いました。

また、村の行政当局は、山村留学参加児童の義務教育期間中、一人につき月額三万円の少子化対策特別助成金を補助する他、家賃補助などの面もバックアップしてくれることになりました。

こうして二〇一〇年度から、親子山村留学の受け入れが始まりました。取り組みを始めて二年後の二二年度には、小中学校の生徒数が二二人まで増え、休校は免れました。以降、生徒数は二〇人前後で推移し、今年四月の時点でも欠学年なし、小

学生二三人、中学生四人の合計一七人です。

留学きっかけに定住した親子も

うれしいエピソードを紹介しましょう。東京に住んでいた男子小学生の母親は、息子の不登校の問題で悩んでいました。母子家庭でひとり育児に行きづまった母親は、他人との距離感が近い場所を求めてさまざまな地域を探し、阿室校区を見つけたそうです。

そして、親子留学で来島したのが二〇一一年のこと。環境が変わったからといっていきなりスムーズに学校に通えるわけではありませんでした。私たちの地域では子は宝です。自分の子でもそうでなくても、地域の人々は子どもを見かけたら声をかけます。

また、この子どもたちは「〇くん」や「△ちゃん」などを付けず、名前だけで呼ばれます。年上の子は下の子を名前呼び、下の子は年上の子を、血縁がなくても「〇兄」「△姉」と呼ぶのです。

こういった風習や人付き合いの近さは、東京では考えられないことだと思います。初めはその子も戸惑ったようですが、「どこに行くの」「学校に行かないなら家のお手伝いをしなさい」「いい子だね」と地域の人々から声を掛けられることで、徐々に心が開かれ、落ち着いてきました。そして半年たった頃から、学校に少しずつ通えるようになったのです。

それから七年がたち、今その子は高校生になりました。阿室校区には高校がないので、中学卒業後は高校の近くに下宿する子が多いのです。でも、

その子は「ここが自分の『居場所』だから、離れたくない」と言っていて、毎朝早起きし、一時間以上かけてバス通学をしています。

そして母親は、道の駅の売店や福祉施設で働いていたのですが、やがて島の人と縁があり、今は結婚して夫婦でカフェを営んでいるんです。

二人とも、島に来た当初は今のような未来は思い描いていなかったでしょう。でも阿室校区に住んで、人生の転機が訪れたんですね。

移住者を含めみんなで一体に

現在、私たち委員会では、本部役員の下に三班を編成して活動しています。

まず、親子山村留学の募集や体験留学の受け入れ、住宅の確保、受け入れ世帯のフォローなどを行う「山村留学班」。二つ目が、イターン・Uターンの者と地域の人々の交流や、地域の伝統遊びなどを伝えるための行事の企画、運営を行う「企画班」。最後に、それら移住者を地域農業の担い手として位置付け、農地集積を行い、農産物の生産を進めたり、農地の共同防除、高齢者農家への援農などを行う「農業班」。

このような組織編成になった背景には、委員会の活動の幅が広がるにつれ、役員の負担が増えてきたという事情があります。そこで、二〇二四年から三班編成にしたことで、委員会活動に企画・運営で関わる人が増えました。世代交代で若返りが図られ、現在の構成員の平均年齢は四七歳、また、イターン・Uターンの者も半数を占め、約四〇人の会員のうち半数は女性です。

各班は自らの班の課題を洗い出し、解決に向け

て全体へ呼び掛け、必要があれば各集落、青壮年団、婦人会、老人会など、地域の協力を得ています。従来から地域に住む人々と新たな移住者たちが一体となって、自分の興味や得意なことを生かしながら、活躍の場を持って活動しています。

実は、現在会長を務める私もイターン者です。〇六年に来島し、当初は教職に就いていましたが、一三年から就農しました。現在はスミューファームという家族経営の農業を営む傍ら、委員会の運営にも関わっています。

復活したキビ、ニンニクに脚光

農業班の取り組みをもう少し詳しくお話しします。まず、耕作放棄地を活用し、イターン・Uターンの者を中心にサトウキビ、タンカンなどを栽培、農地の有効利用を図っています。特にサトウキビは、製糖工場の撤退で一九九二年以来生産が途絶えていましたが、徐々に復活の兆しを見せ、現在は村内の黒糖焼酎工場の原料として契約栽培するなど、安定した取引先を確保しています。

また、同じく途絶えかけていた農作物の復活例に、宇検在来の島ニンニクがあります。これは元来「ヘダニンニク」「サキバルニンニク」と呼ばれる皮に赤みのある小粒ニンニクで、香りが強く、島の暑さを取り切るスタミナ食材でした。昔から、素焼きの壺に塩漬けにして食べてきたそうです。

この島ニンニクを、小中学校の教職員や子どもたちと共に五〇町の畑に植え付け、現在はインターネットでも販売しています。二〇一六年度には三〇〇万円を売り上げ、地域活性の重要な資金のひとつとなりました。

この他、私の農地ではフィンガーライム、レモン、ボタンボウフウ(長命草)などを栽培しています。フィンガーライムは聞き慣れない名前かと思いますが、元はオーストラリアの亜熱帯に自生するかんきつ類です。その名の通り指のように細長いライムで、折ると中からキャビアのようなつぶつぶが出てきます。穏やかな酸味と香りが特徴で、東京都内のレストランなどに出荷しています。奄美生まれの新しい農産物として、これからも全国に発信していくつもりです。

来年には、委員会を立ち上げて一〇年目を迎えます。おかげさまで阿室校区には子どもたちや移住者が増え、一〇年〜一七年で三五世帯・七九人が移住し、地域はにぎやかになりました。高齢化率は四八・四%から三九・八%まで下がっています。

新たな課題もあります。移住者の増加で空き家対策が進んだのはよいのですが、逆に住居の確保が難しくなってきたのです。校区内への移住希望者からの問い合わせがあっても、現在ある空き家は大掛かりな改修が必要なため、行政と連携して、新たな村営住宅建設を進めているところです。

また、島暮らしには就業の場が少ないという課題が付きものです。最近ではイターンの女性が飲食や観光、食品加工業などで起業しています。島ニンニクのオイル漬けなどは東京のアンテナショップにも出荷しており、地域資源の掘り起こしにも努めています。

奄美の良さといえば、自然の美しさ、深く根付いている伝統文化、地域住民がつながる「結いの心」です。これらを大切にしつつ、地域の課題を地域の皆と一緒に解決していきたいと思えます。

『いま蘇る柳田國男の農政改革』
山下 一仁 著



(新潮社・1,600円 税抜)

現在の農政に生かせる柳田の思考

村田 泰夫

(ジャーナリスト)

日本民俗学の祖として知られる柳田國男は、明治三三年に当時の農商務省に入省し、農政改革に携わった農林官僚でもあった。柳田の農政論を研究する著者の山下さんは、柳田の農政論を今に生かせと主張する。

柳田の問題意識は「なぜ農民は貧しいのか」にあった。突き詰めていくと、零細な経営規模と当時の地主・小作制にあった。その解決策として、経営規模を拡大するために、小作人を専門的な農家に育てる必要があると考えた。「中農養成策」といわれる彼の考え方は、地主階層から強い反発を受けた。零細な小作人に支えられていた地主階層としては、小作人を減らす政策は受け入れられなかった。

また、地主階層は、保護関税の導入で米価を引き上げるべきだと主張していた。小作人から小

作物を現物の米で受け取っていた地主としては、米価の上昇は所得の増加を意味した。これに対し柳田は、消費者のことを考えると米価引き上げではなく、構造改革による生産性の向上とコストダウンで農家所得を上げるべきだと反論した。

翻って、現在の日本農業の問題点は何か。昔と変わらない問題が存在すると山下さんは指摘する。かつての地主階層が主張していたのと同じように、関税で米価をつり上げ、零細な稲作農家の保護を主張する勢力が、今の日本の農業界を支配しているからだという。

柳田の農政論を今の農政に生かせば、どういうことになるだろうか。大規模な生産調整をやめて米を増産する。生産性が向上し米価は下落する。価格競争力ができて輸出の道が開ける。米価下落で稲作から撤退した零細兼業農家は大規模層に農地を貸し出す。大規模農家に限定して直接支払いを実施すれば、地代支払い能力の増えた大規模層が賃借料を引き上げ、零細農家も満足する。

膨大な財政資金を投入する減反政策で米価をつり上げ、消費者に大きな負担を強いる農政は異常である。米価を下げて輸出できるようにしておけば、万が一の時も米不足を防げる。もちろん自給率も上がる。

柳田のまっとうな農政論は当時の農業界から疎んじられたが、今も山下さんの主張は少数派である。

読まれています 三省堂書店農林水産省売店 (2018年8月1日～8月31日・税抜)

タイトル	著者	出版社	定価
1 食料・農業・農村白書 平成30年版	農林水産省／編	日経印刷	2,600円
2 タネはどうなる?! 種子法廃止と種苗法運用で	山田 正彦／著	サイゾー	1,300円
3 森林・林業白書 平成30年版	林野庁／編著	全国林業改良普及協会	2,200円
4 水産白書 平成30年版	水産庁／編	農林統計協会	2,400円
5 本当はダメなアメリカ農業	菅 正治／著	新潮社	740円
6 スマート農業のすすめ 次世代農業人【スマートファーマー】の心得	渡邊 智之／著、 産業開発機構／編	産業開発機構	1,800円
7 水産小六法 平成30年度改訂版	水産法令研究会／著	水産社	15,000円
8 食料農業の法と制度	井上 龍子／著	金融財政事情研究会	2,200円
9 森づくりの原理・原則 自然法則に学ぶ合理的な森づくり	正木 隆／著	全国林業改良普及協会	2,300円
10 攻めの農林水産業のための知財戦略 食の日本ブランドの確立に向けて	農水知財基本テキスト 編集委員会／編	経済産業調査会	4,900円

第二回「アグリフードEXPO大阪2019」の 出展者を募集しています

「アグリフードEXPO」は、プロ農業者たちの国産農産物と加工食品の展示商談会です。

この出展対象は、農業者および国産農産物（水産物を除く）を主原料とする食品を主として扱う国内食品製造業者の皆さまです。

二回目となる今回は、二〇一九年二月二〇日（水）～二二日（木）に、ATCアジア太平洋トレードセンターにおいて開催します（第一六回「シーフードショー大阪」も同時開催）。

募集期間は一〇月一日（月）から二月九日（金）までです。会場の都合上、募集する三〇〇小間に達し次第、受け付けを終了しますので、お早めにお申し込みください。

詳細については、公式ホームページ（<https://www.agri-foodexpo.com/>）をご覧ください。

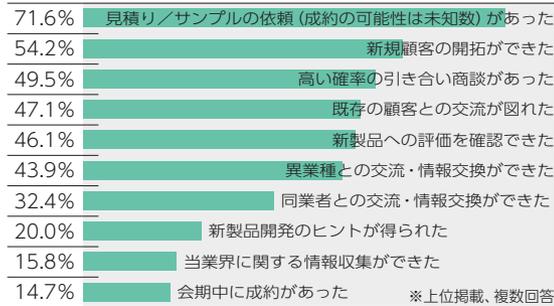
また、第一回「アグリフードEXPO大阪2018」の出展者・来場者のアンケート結果を掲載します。（参考にしてください。）

（情報企画部）

第11回「アグリフードEXPO大阪2018」の出展者アンケート結果

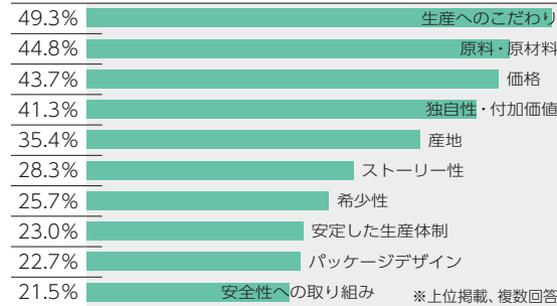
■出展者数…合計/490社 374小間 ※共同出展含む
■会期中商談件数 1社平均/26件 最高/300件

出展の成果



■会期中成約件数 1社平均/4件 最高/49件
■会期中成約金額 1社平均/212万円 最高/1億円

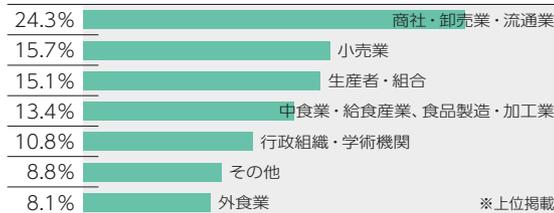
来場者の関心



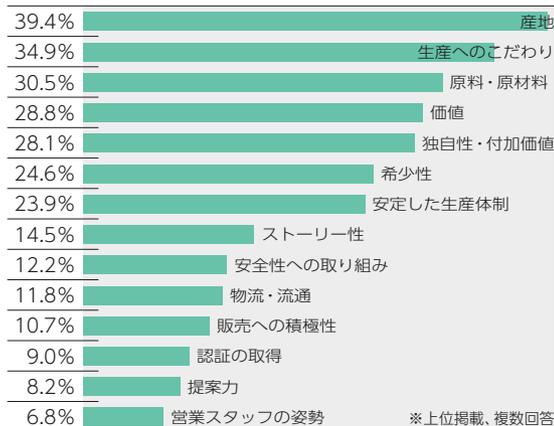
第11回「アグリフードEXPO大阪2018」の来場者アンケート結果

■公式登録総来場者数…15,876人（2017年度 15,262人）

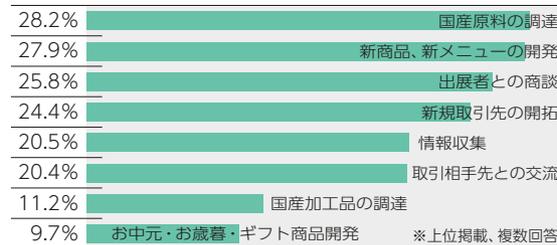
業種



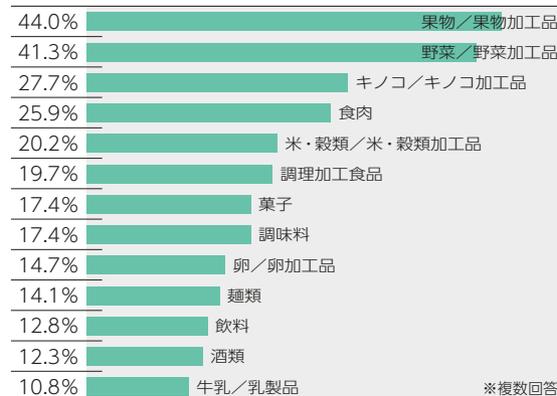
取引で重要視する点



来場の目的



興味のある食材



EXPO 東京
**全国六七八先の出展者の
 販路拡大を支援**

八月二日(水)、二三日(木)に
 国産農産物をテーマとした、第一
 三回「アグリフードEXPO東京
 2018」を開催しました。

全国から六七八の農業者や食品
 製造業者、六次産業化支援技術を
 提供する事業者の方々にご出展い
 ただき、全国の魅力ある農産物や
 地元産品を活用したこだわりの加
 工食品を、バイヤーへ積極的にP
 Rしました。

今回のEXPO東京では、来場
 者数一万二三八五人、商談引き合
 い件数六三四九件に上り、活発な
 商談が行われました。

開催初日は磯崎陽輔農林水産副



大勢のバイヤーでにぎわう会場

大臣が来場され、開会式列席後、
 会場内の「アグリフードEXPO
 輝く経営大賞」受賞者をはじめ、
 多くの出展ブースを視察、出展者
 を激励していただきました。

今回初設置の「イチオシメ
 ニューコーナー」には、出展者のオ
 リジナルメニューが並び、バイヤー
 は興味深げに足を止め、好評でした。
 出展者からは「出展を続けるこ
 とで、販路が少しずつ広がってい
 る」「開発途中の商品に対して、意
 見をいただく良い機会だ」などの
 感想が寄せられました。また、バイ
 ヤーからは「何度も来場している
 が毎回違った発見がある」「年々進
 化していることにいつも驚く」な
 どの声が寄せられました。於：東京

ビッグサイト
 (情報企画部)



会場を視察される磯崎農林水産副大臣

**アド
 バイザー**
**期待膨らむ
 農業経営アドバイザー**

九州農業経営アドバイザー連絡
 協議会大分支部連絡会を開催。大
 分県から、今年度に設置される「お
 おいた農業経営相談所」の構成員
 に大分支部を加えることや、農業者
 の経営診断をアドバイザーに依頼
 することなどの説明を受けました。

参加者からは、「農業経営アドバ
 イザーの活動が具体化してきた。積
 極的に取り組みたい」などの感想が
 寄せられました。これを機に農業者
 の課題解決に向け、アドバイザーが
 活躍する場面が増えていくことが
 期待されます。六月二三日、於：大分
 市、参加者：農業経営アドバイザー
 など二二人
 (大分支店)



大分県から農業経営相談所の説明を熱心に聞く参加者

セミナー
**生産量日本一の白花豆で
 地域活性化を考える**

白花豆を活用した地域づくりセ
 ミナーを共催。講演では女性農業
 者が発起人の市民団体、るべしべ白
 花豆くらぶ副会長の茂住秀二氏が
 白花豆畑を巡るツアーなどを事例
 に地域活性化の可能性を語りまし
 た。試食会では、冷製スープやコ
 ロツケなど五種の白花豆料理を提
 供、また公庫職員が考案したスムー
 ジーのレシピを配布しました。

飲食業者からは「生産現場を知っ
 たことはメニュー開発の参考と
 なった」との声が寄せられました。
 七月二六日、於：北見市、参加者：生
 産者や飲食業者など二〇人、共催：
 るべしべ白花豆くらぶ(北見支店)



試食会で並ぶ白花豆料理。左上はスムージー

みんなの広場

七月号「農業界に『運べない』危機」を読んで、運送業の人手不足の影響が農業界に及んでいることを痛感した。

農畜産物は鮮度が命だ。物流が滞ると、信用問題に発展する。黄信号が点灯している今こそ、対策を講じるべきだ。

株式会社共同は、同一方面には他社と協働し輸送している。一つの企業や一つの業界ではなく手を組むことが大切だ。共同のような仕組みは、一朝一夕にできるものではないと思うが、手をこまねいている余裕はない。

生産、卸売、小売、物流の各業界

「平成30年北海道胆振東部地震」により被害を受けた皆さまに対しまして、心よりお見舞い申し上げます。

日本公庫農林水産事業では、本災害により被害を受けられた農林漁業者など皆さまを対象とする窓口を設置し、ご相談を受け付けています。

ご融資やご返済に関するご相談に、政策金融機関として迅速、かつ、きめ細かな対応を行ってまいります。

「平成30年北海道胆振東部地震」により被害を受けられた農林漁業者など皆さまを対象とする窓口を設置し、ご相談を受け付けています。

ご融資やご返済に関するご相談に、政策金融機関として迅速、かつ、きめ細かな対応を行ってまいります。

お問い合わせ先

札幌支店 TEL:011-251-1261

帯広支店 TEL:0155-27-4011

北見支店 TEL:0157-61-8212

が手を組み一丸となって課題解決に向け取り組むことだ。「農産品物流対策関係省庁連絡会議」にも期待したい。

(広島市 巨幸男)

みんなの広場へのご意見募集

本誌への感想や農林漁業の発展に向けたご意見などを同封の読者アンケートにてお寄せください。「みんなの広場」に掲載します。二〇〇字程度ですが、誌面の都合上、編集させていただきます。

「郵送およびFAX先」

〒000-0000
東京都千代田区大手町一四
大手町フィナンシャルシティノースタワー
日本政策金融公庫 農林水産事業本部
AFCフォーラム編集部
FAX 〇三三三七〇一三三五〇

編集後記

④ 工業製品とは異なり、作り手によって品質が異なる農畜産物は、現物を見ないと不安なもの。実際に自分がインターネットを通じて購入した農畜産物は生産者を知っているか、過去に食べた経験のあるものばかりです。その不安を払拭するため、eコマースにも作り手と消費者をつなげるなどの動きが見られますが、さてその実力は。

(西山)

④ 特集で長瀬さんが触れている、消費者によるネットスーパーの送料負担。食品配送はコスト高であり、消費者による送料負担が必要とのご意見、全く同感です。ただ、現実の自分は、重い飲料を中心に、送料無料となることを前提にネットスーパーを利用する日常。すぐにシステムを変えられるか……意識改革が必要なようです。

(高雄)

④ 多論百出を読んで田んぼの見方が変わりました。「農業湿地」という言葉は初めて知りましたが、水田は五六八種の生き物の記録もある湿地で、生息する生き物を資源と捉え取り組めばご飯もおかずも取れる上、地域資源の持続も可能だと呉地さんは言います。「農業湿地」と田んぼを見たら、田んぼがますますありがたいものになりました。(城間)

④ 「まちづくりむらづくり」の奄美大島の宇検村、子どもたちが名前を呼ぶ際は「ちゃん、くん」を付けず、年上は「〜兄、姉」と呼ぶ話。昨年まで住んでいた沖縄の離島も同じで、関東育ちの私は最初驚いたの思い出しました。鳥暮らしの良さの一つは、濃密な人付き合いだと思います。親子でそれを体感できる宇検村の山村留学、素敵ですね！(前島)

AFCフォーラム Forum

■編集
元 鳴谷 元 西山 大也 高雄 和彦
柴崎 勇太 城間 綾子 前島 幸子
鈴木 晃子

■編集協力
青木 宏高 牧野 義司

■発行
(株)日本政策金融公庫 農林水産事業本部
Tel. 03(3270)2268
Fax. 03(3270)2350
E-mail anjoho@jfc.go.jp
ホームページ https://www.jfc.go.jp/

■印刷 凸版印刷株式会社

■販売
株式会社日本食糧新聞社
〒104-0032 東京都中央区八丁堀2-14-4
ヤブ原ビル
Tel. 03(3537)1311
Fax. 03(3537)1071
ホームページ
http://info.nissyoku.co.jp/koudoku/
お問い合わせフォーム
http://info.nissyoku.co.jp/modules/form_mail/

■定価 514円(税込)

④ ご意見、ご提案をお待ちしております。

④ 巻末の児童画は全国土地改良事業団体連合会主催の「ふるさとの田んぼと水」子ども絵画展の入賞作品です。

国産にこだわり
農と食を
つなぎます。

第12回 アグリフードEXPO大阪 2019

プロ農業者たちの国産農産物・展示商談会

日時

2月20日(水) / 21日(木)

10:00~17:00

10:00~16:00

主催

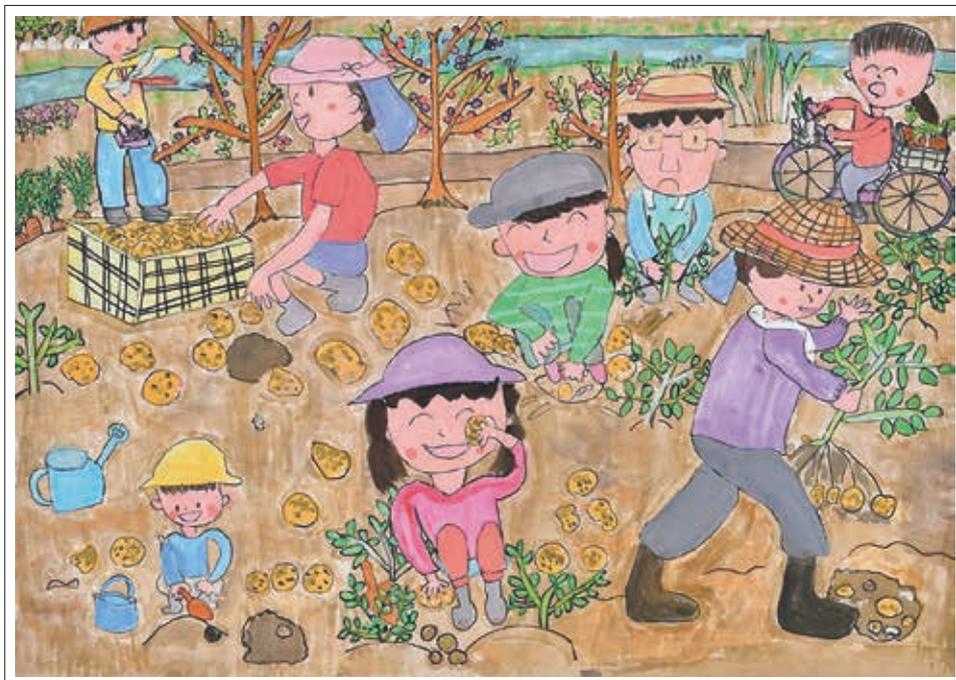
日本政策金融公庫

会場

ATC アジア太平洋トレードセンター



食べるeコマースの実力



『畑は実りがいっぱい!』小林 咲心 栃木県宇都宮市立宮の原小学校

■AFCフォーラム 平成30年10月1日発行(毎月1回1日発行)第66巻7号(818号)
 ■発行/ (株)日本政策金融公庫 農林水産事業本部 〒100-0004 東京都千代田区大手町1-9-4 Tel.03(3270)2268
 ■販売/ 株式会社日本食糧新聞社 〒104-0032 東京都中央区八丁堀2-14-4 〒7原ビル Tel.03(3537)1311 ■定価514円 本体価格476円

